

# 戦後史

千葉市立千葉高等学校 小松 信

## (1) はじめに

今回は「世界史Aで戦後史をどう教えるか」の試案である。第二次世界大戦が終了した1945年より65年。しかも2009年は冷戦終結からちょうど20年目であった。これだけ年月が経っているのだから、世界史の授業で戦後史を教えなければならないのは当然である。しかし教える以上、教員の中で戦後とはどういう時代で、どのような特徴がある時代なのかを総括されていなければならない。そしてそれらを踏まえて授業を展開しなければ、話としては面白いが、総花的・網羅的になってしまい、授業が終わった後で生徒たちに戦後史の全体像をイメージさせることができない。そうなるとうりながら生徒たちが今生きている「現在」の位置を把握できず、将来を展望することもできなくなる。さらに、今の高校生たちはベルリンの壁崩壊・冷戦終結・ソ連消滅以降に生まれてきており、国際政治の大きな事件で頭に残っている最初の映像が同時多発テロ（9・11事件）ということが多く、つまり、我々教員にとっての「同時代史」と生徒たちのそれとがあまりにも異なっているのである。授業でこれは知っているだろうと教員が話すことのほとんどが、生徒たちには初めての（＝知らない）知識・情報であることを認識して私たちは授業に臨まなければならない。

このような中で、世界史Aにおいて数時間（拙稿では6時間）で戦後史を教えることは、はっきりいってキツイ。たとえば戦後史の総括。多くの歴史学者や国際政治学者が戦後のそれなりの総括・定義づけ（＝戦後とは～という時代）を行っているが、全体像の総括をあまり見かけない。しかも、使用している言葉や内容が高校生にとっては抽象的で理解することが難しい。従って、我々教員が授業で戦後史を教える際にまずやらなければ

ならないことは、自分なりの戦後史の総括である。つまり、先行研究を踏まえつつも、自分なりの「戦後とは～という時代である」という総括を行う。そして、それを生徒たちが理解できるよう、目の前の生徒をイメージしつつ授業の構成・内容・導入・展開を考えることが必要となる。

## (2) 私なりの戦後史の総括と授業構成

戦後史で一番大きな転換点はベルリンの壁が崩壊し、冷戦が終結した1989年であることに異論はないだろう。そこで戦後史を教える場合、1945～1989年と、1989年以降に分けて教えるのがよい。まず1945～1989年は冷戦の時代である。46年の「鉄のカーテン」演説、翌年のトルーマン＝ドクトリンの発表に始まり、89年のベルリンの壁崩壊後のマルタ会談まで続いた冷戦は、米ソの軍事的（二極）対立という側面と自由主義・資本主義市場経済と社会主義計画経済（＝マルクス・レーニン主義）のイデオロギーの対立という側面があった。そしてこの冷戦の時代は、近代世界システム論というアメリカの覇権の時代とも重なる。その際、ベトナム戦争の敗北（＝覇権国家の軍事的敗北と膨大な軍事費が経済を逼迫させる）とドル＝ショック（＝戦後の国際経済のレジームであったブレトン＝ウッズ体制の崩壊）がターニングポイントになる。

冷戦と並ぶこの時期のもう1つの潮流が脱植民地化＝「国民国家」の建設である。この動きは1940年代後半に東アジア・南アジアで始まり、1950年代には西アジア・北アフリカへ、そして1960年の「アフリカの年」に見られるように1960年代にはサハラ以南のアフリカに及んだ。そしてこの脱植民地化の潮流を象徴するのが、1955年に開催されたバンドン会議と1961年に開催された第1回非同盟諸国首脳会議である。またこの時代は

国際政治における主体（アクター）は国際連合（以下、国連と記す）などの国際機関を除けば、ほとんどの場合（主権）国家であった。

次に1989年以降について。この時代をよくポスト冷戦の時代、覇権後の時代という。間違っていないだろうが、その中身を説明しなければ総括・定義づけとしては不十分であろう。国際政治学者の田中明彦氏はこの時代を「新・危機の20年」と名づけ、この時代にアメリカ一極主義と市場原理主義が登場し退場した、と説明している（『ポスト・クライシスの時代』）。これを参考にすれば、この20年は政治的にはアメリカが一極主義をめざすも失敗し、多極に向かう時代、社会的・経済的にはインターネットに代表される（アメリカ発の）グローバル化が進行し、それと表裏一体になった市場原理主義が広がった時代（当然それらには光と影があり、それらの存在・進行に対してイスラム勢力など反発する勢力が登場した時代でもある）と総括することができる。さらにこの時代の主体として、多国籍企業・地域組織（地域統合）・国際機関・NGO・「テロリスト」など非国家主体が登場し、大きなプレゼンスを発揮しつつあるのもこの時代の特徴であり、これらが多極化の要因にもなっている。また1945～1989年までが脱植民地化＝「国民国家」建設の時代であったのに対し、この時代は共同幻想である「国民国家」に揺らぎが見えた時代であり、「国民国家」以外に自己のアイデンティティを求める動きが起こった。EUなどの地域組織の成立や多発する地域紛争などがその例である。

以上、戦後史の総括について私見を記してみた。まだまだ整理されていない面が多々あるが、この総括を踏まえての戦後史の6時間の授業構成並びに目標を提示したい。

#### 《単元》戦後史（6時間）

- 1時間目：戦後史の枠組みと大きな流れ
- 2時間目：冷戦の展開Ⅰ
- 3時間目：冷戦の展開Ⅱ
- 4時間目：脱植民地化
- 5時間目：1989年以降の時代Ⅰ
- 6時間目：1989年以降の時代Ⅱと日本の進路

#### 《単元目標》

- ①戦後を1945～1989年、1989年以降に分け、それぞれの時期の特徴を説明することで、戦後史の枠組みと大きな流れを把握させる。
- ②1945～1989年の大きな潮流の1つである冷戦（世界）の変遷（冷戦構造の成立 [1940年代後半～1950年代半ば] →「雪どけ」 [1950年代半ば～1950年代末] →冷戦再燃？ →緊張緩和 [1960年代] →多極化 [1968～1973年] →「新冷戦」 →冷戦終結 [1970年代半ば～1989年]）を理解させ、冷戦とは何であったのか、どうして冷戦は終わったのか、どうして第三次世界大戦が起きなかったのか等について把握並びに思考させる。
- ③冷戦期の脱植民地化の動き並びにその新たに独立した国々が戦後の国際政治において果たした役割について理解させる。さらに独立後経済的に成功＝発展した国とそれに失敗した国を比較し、その理由について考察させる。
- ④1989年以降の世界について、アメリカの一極主義と多極化、グローバル化、市場原理主義、非国家主体などをキーワードにして理解させ、今自分たちが生きている「現在」の位置を歴史的に把握させる。そしてそれを踏まえて、今後の日本、そして地球の進むべき道について考察させる。

#### （3）指導経過

今までの二つの拙論（『世界史のしおり』4月号、10月号掲載）では、それぞれ2時間の授業すべての指導経過を記したが、ここでは授業時間の多さ、並びに誌面的な制約のため、6時間の授業のうち、3時間（1時間目、4時間目、5時間目）の導入例をそれぞれ1つずつ提示する。

まず1時間目＜戦後史の枠組みと大きな流れ＞の導入について。

**【ベルリンの壁崩壊】** 昨年の夏開催された世界陸上ベルリン大会のあるテレビ局のキャッチコピーは「ベルリンの壁が再び崩壊する」でした。ということは、かつてベルリンの壁というもの

があって、それが壊された、ということだよ。その年を資料集で調べてみよう。そしてこの壁崩壊の翌月に何があったか調べてみよう。

『明解世界史図説 エスカリエ』（以下、資料集と記す）を調べた生徒から1989年という答えはすぐに返ってくる。そして翌月のマルタ会談での冷戦終結という答えも出てくる。そこで次に「冷戦って何？」と尋ねる。冷戦は中学校でも習っているので、何人かに当てれば、第二次世界大戦後、アメリカを中心とする西側陣営とソ連を中心とする東側陣営が対立したこと、という答えは出てくる。次に、資料集の索引に載っている「ベルリン」で始まる戦後の用語を挙げさせる。ここで出てくるのは、ベルリン封鎖（1948年）とベルリンの壁（建設1961年、崩壊1989年）の2つである。それぞれについて簡単に説明し、米ソが軍事的に対立する冷戦が1989年まで続いたこと、アメリカを中心とした西側陣営は資本主義市場経済を採り、東側陣営は社会主義計画経済を採っていたこと、そして1991年には一方の当事者のソ連が消滅したことなどを話して、以下の板書を行う。

- ①戦後史はベルリンの壁が崩壊し冷戦が終結した1989年以前と以後に分けられる。
- ②1945～1989年の歴史の大きな潮流＝冷戦
- ③冷戦には米ソの軍事的対立の側面と資本主義市場経済・自由主義VS社会主義計画経済・マルクス＝レーニン主義のイデオロギーの対立の側面があった



「エスカリエ」p.172  
④東西分断の象徴「ベルリンの壁」の建設



「エスカリエ」p.180  
②壁をこわす市民

その後、冷戦の変遷を教えるわけであるが、その際、人物（例：ケネディ、ゲバラ）を中心に授業の一部を構成したり、音や映像、そしてモノ（例：ベルリンの壁の破片）を教室に持ち込むなどの工夫が必要となる。

次に4時間目「脱植民地化」の導入について。

【国連の加盟国数の推移】 以下の数字はある国際機関の加盟数の推移です。その機関の名称を答えよう。

1945年	1955年	1970年	2008年末
51か国	76か国	127か国	192か国

生徒が多くの国際機関を知らないことと、51という数字などから、国連という答えはわりと返ってきてやすい。さらに資料集p.171②のように、地域ごとに各年の加盟国の数字が出ているグラフを見せる。



そして、1945年から1955年の変化、1955年から1970年の変化についてわかることを質問すると、1945年から1955年に国連の加盟国が増えたのはアジア（9→21）であり、1955年から1970年にかけて一気に加盟国が増えたのがアフリカ（5→42）である、という答えが返ってくる。そこで、戦後のもう一つの大きな潮流として脱植民地化があることにふれ、以下の板書をして説明を行う。

1945～1989年の潮流② 脱植民地化

1940年代後半：東アジア・南アジア

1950年代：西アジア・北アフリカ

1960年代：サハラ以南のアフリカ

←1960年の「アフリカの年」

以下、いくつかの国について説明を加える。その国を選ぶ基準は、地域的な分布を配慮しつつも、戦後の大きな事件に「関わった」国、第三勢力の中で大きな役割を果たした国、経済的に成功している国と失敗している国、戦後地域紛争・内戦が起きていた国などである。たとえば、韓国・ベト

ナム・インド・イラン・ガーナ・ルワンダなどがよいだろう。インドではイギリス植民地からの分離独立、ネルー（と周恩来）の平和五原則とバンドン会議（資料集p.174④⑤）、ネルー王朝\*、ヒンドゥー至上主義、BRICSなどについて説明する。ガーナとルワンダは地図で位置を確認したのち、ガーナではエンクルマと第1回非同盟諸国首脳会議（資料集p.174⑥）、ルワンダでは（ベルギーの）植民地支配が原因となったルワンダ内戦（資料集p.187⑩）と現在数多く存在する「破綻国家」について説明する。そしてこの授業の最後に、同じように政治的独立を果たしたにもかかわらず、なぜ現在経済的に成功＝発展した国とそれに失敗した国が生まれたのか、歴史的な視点から考察させたい。

最後に、5時間目<1989年以降の時代I>の導入について。

#### 【1989年以降のアメリカの戦争】

1991年  a 戦争

安保理決議678＝「武力行使容認決議」による  
多国籍軍で戦う

2003年  b 戦争

安保理＝武力行使は時期尚早  
イギリス軍の支援をうけたアメリカ軍中心で戦う

a  b に入る言葉を答えよう



「エスカリエ」p.186 湾岸戦争④炎上するクウェートの油田と米軍の装甲車

資料集（の年表）などを参考に、すぐ a = 湾岸、b = イラクという答えが返ってくる。次に、2つの戦争と国連との関係、そして投入された軍隊の構成について質問する。ここでもすぐに、湾岸戦争は国連の支持のもと多国籍軍が構成・投入され、

アメリカはその一員として参加して行われた戦争だが、イラク戦争は国連の支持を得ないでアメリカが実質上単独で行った戦争である、という答えが出てくる。そこで以下の説明を行う。1989年以降のアメリカは、最初は各国との協調主義を採っていたが、9・11事件以降は単独行動主義（ユニラテリズム）を採るようになった。しかしそれも失敗に終わり、2009年1月に就任したオバマ大統領が各国との協調姿勢、国連を今までより重視する姿勢を表明している。つまり、1989年以降の20年間は、唯一の超大国となったアメリカが国際協調主義から単独行動主義に方向転換したが、再び国際協調主義に戻ろうとしている時代であった、ということができる。このことは経済面でも同様である。1989年以降、唯一残った経済体制である市場経済が「暴走」し、アメリカ発の市場経済原理主義が世界を席卷したが、昨年のリーマン・ショックに端を発する「世界同時不況」により先進各国は市場経済原理主義を「捨て」、その解決に向け多くの国・地域組織・国際機関が協力するようになってきている。換言すれば、冷戦終結後、一極（単極）をめざすかに見えた世界が多極の世界になっていく過程がこの20年間であった、といえるだろう。

#### （4）おわりに

世界史Aのみならず歴史教育において、現代史（＝戦後史）の授業は是非とも行わなければならない。それまでの授業は現代史の授業を行うためにあるといっても過言ではない。しかし、授業時間が足りず現代史の授業ができない、やっても駆け足で終わる、何を教えたらいいかかわからない、網羅的になってしまう、などの悩みが多いのも事実である。この拙稿は、多くの先生方と同様の悩みを抱えつつ、試行錯誤の末に生まれた授業実践（例）である。まだまだ不十分な点が多々あるかとは思いますが、戦後の授業を行う際の叩き台としていただき、かつご意見ご批判等いただければ幸いです。

\* ネルー、娘インディラ＝ガンディー、孫ラジブ＝ガンディーと一族が首相をつとめている。